

## 「青森挽歌」における場のダイクシス

松本 修

### プロローグ

ダイクシスは直示体系ないし直示と訳される概念であり、言語的文脈だけでは意味が定まらず、その語が指し示す具体的な場面や物そのものが直に示されることで意味がさだまるような言語・場面の媒介的性質を持つ語彙をさす。その代表的な枠組みは、「人称」・「時間」・「場所」・「文脈」である。他に社会的ダイクシスとして敬語などを考えることもあるが、文学テクストの分析に应用する場合には、ほぼこの四つの枠組みで足りよう。その概念は例えば次のように説明されている。

「わたし」や「いま」や「ここ」のように、その語の意味が、発話の場面において、話し手を中心とした時間的・空間的な座標軸上で決定されるようなことばの特性をダイクシス (deixis) という。したがってダイクシスは、基本的に「話し手が中心である」(egocentric) という性質をもっている。ダイクシスということばは、ギリシア語の「指し示す」という意味を持った語に由来する。(1)

本質的にダイクシスとは、言語が発話の文脈 (context of utterance)、あるいは発話事象 (speech event) の素性を記号

化または、文法化する方法とかわるものである。したがって、発話の解釈が、発話の文脈の分析に依存するという方法ともかわるものである。(2)

語用論で言うダイクシス概念においては、もっぱら現実の場面が問題となるわけであるが、フィクショナルな文学テクストにおいては、むしろダイクシスによって、仮想現実としての場面、人物関係、時間構造が形づくられることになる。そうして、文学テクストの読みにおいてダイクシスを焦点化することによって、語り手を中心に形成される、語りの構造が意識化されることになる。文学テクストの読みにおいて、前提的に読者間に共有されなければならないのはこの語りの構造であるから、読みにおけるダイクシス分析の効用は重要なものと認められよう。

ここでは、宮澤賢治の詩、「青森挽歌」の場のダイクシスに着目し、その分析を通じて、「青森挽歌」の語りの構造を、語りの場、語られる世界の空間的構成という側面から検討するとともに、場のダイクシスという概念の有効性を確かめたい。

### 「青森挽歌」における語り手

まず、確認しておかなければならないのは、「青森挽歌」の語り手をどのように考えるべきかという前提である。

詩のテクストにおける語り手は、詩人その人と考えられるのが通

常であり、そういう意味では「青森挽歌」の語り手は基本的には宮澤賢治その人と見られることになる。しかし、賢治の詩作品は、もともと賢治自身、「心象スケッチ」という独特な位置付けをしているものであり、賢治の文学の本質にもかかわって、簡単には位置付けられないのである。詳しい議論は別の機会に譲るとして、<sup>(3)</sup>賢治の詩の語り手は、一般の詩に比べて、仮構された性格が強く、しかも、一つの詩の内部において、様々な変容を見せる。こうした語りの構造の複雑さが、賢治の詩をダイクシスの観点から分析しようとする一つの契機でもあり、また、意義ともなるわけである。

ここでは、「青森挽歌」の語り手は、妹とし子を失った賢治自身として一応扱うが、それは生身の賢治自身というよりは、そのような境遇、精神的状況に仮構された賢治その人である、として、一応の距離を保っておきたい。

## 「青森挽歌」のダイクシス

少々長くはなるが、「青森挽歌」の全体を掲げ、ダイクシス分析の対象となる部分に傍線を引いて示しておく。

傍線は、場所、時、人称のダイクシスに限定し、分析は場のダイクシスに限定して行うこととする。場のダイクシスについては傍線、時のダイクシスについては二重傍線、人称のダイクシスについては波線で示す。

### 青森挽歌

1

こんなやみよのはらのなかをゆくときは  
客車のまどはみんな水族館の窓になる

(乾いたでんしんばしらの列が

せはしく遷つてゐるらしい

きしやは銀河系の玲瓏<sup>れいろう</sup>レンズ

巨きな水素のりんごのなかをかけてゐる

5

りんごのなかをはしつてゐる

けれどもここはいつたいどこの停車場<sup>ば</sup>だ

枕木を焼いてこさえた柵<sup>さく</sup>が立ち

10

(八月の よるのしづまの 寒天凝膠<sup>かんてんじょう</sup>)

支手のあるいちれつの柱は

なつかしい陰影だけでできてゐる

黄色なラムプがふたつ点き

せいたかくあほじろい駅長の

真鍮棒も見えなければ

15

じつは駅長のかげもないのだ

(その大学の昆虫学の助手は

こんな車室<sup>くるしむ</sup>いつぱいの液体のなかで

油のない赤髪<sup>あかみ</sup>をもぢやもぢやして

かばんにもたれて睡つてゐる)

20

わたくしの汽車は北へ走つてゐるはづなのに

ここではみなみへかけてゐる

焼杭の柵はあちこち倒れ

はるかに黄いろの地平線

25

それはビーアの澱おとしをよどませ  
あやしいよるの 陽炎と

さびしい心意の明滅にまぎれ  
水いろ川の水いろ 駅

30

(おそろしいあの水いろの空虚なのだ)  
汽車の逆行は希求ききうの同時な相反性

こんなさびしい幻想から

わたくしははやく浮びあがらなければならぬ  
そこらは青い孔雀のはねでいつぱい

真鍮の睡さうな脂肪酸にみち

35

車室の五つの電燈は  
いよいよつめたく液化され

(考へださなければならぬことを

わたくしはいたみやつかれから

なるべくおもひださうとしない)

40

今日のひるすぎなら  
けはしく光る雲のしたで

まつたくおれたちはあの重い赤いポムプを

ばかのやうに引っぱたりついたりした

おれはその黄いろな服を着た隊長だ

だから睡いのはしかたない

(お、おまえ、せはしいみちづれよ  
アイレ ドレホ ニヒト フオン デヤ ステルレ

どうかここから急いで去らないでくれ

(尋常一年生 ドイツの尋常一年生)

いきなりそんな悪い叫びを

投げつけるのはいつたいたれだ

けれども尋常一年生だ

夜中を過ぎたいまごろに

こんなにはつちり眼をあくのは

ドイツの尋常一年生だ)

あいつはこんなさびしい停車場を

たつたひとりで通つていつたらうか

どこへ行くともわからないその方向を

どの種類の世界へはいるともしれないそのみちを

たつたひとりでさびしくあるいて行つたらうか

(草や沼やです

一本の木もです)

(ギルちゃんまつさをになつてすわつてゐたよ)

(こおんなにして眼は大きくあいてたけど

ぼくたちのことはまるでみえないやうだつたよ)

(ナーガラがね 眼をぢつとこんなに赤くして

だんだん環をちいさくしたよ こんなに)

(し 環をお切り そら 手を出して)

(ギルちゃん青くてすきとほるやうだつたよ)

(鳥がね たくさんたねまきのときのやうに

ばあつと空を通つたの

でもギルちゃんだまつてゐたよ)

(お日さまあんなり変に飴色だつたわねえ)

(ギルちゃんちつともぼくたちのことみないんだもの

ぼくほんたうにつらかつた)

(さつきおもだかのとこであんまりはしやいでたねえ)

(どうしてギルちゃんぼくたちのことみなかつたらう

80" 忘れたらうかあんなにいつしよにあそんだのに」

かんがへださなければならぬことは

どうしてもかんがへださなければならぬ

とし子はみんなが死ぬとなづける

そのやりかたを通つて行き

それからさきどこへ行つたかわからない

それはおれたちの空間の方向ではかられない

感ぜられない方向を感じやうとするときは

たれだつてみんなぐるぐるする

85 (「耳ごうどなつてさつぱり聞けなくなつたんちやい」)

さう甘へるやうに言つてから

たしかにあいつはじぶんのまはりの

眼にははつきりみえてゐる

なつかしいひとたちの声をきかなかつた

にはかに呼吸がとまり脈がうたなくななり

それからわたくしがはしつて行つたとき

あのきれいな眼が

なにかを索めるやうに空しくうごいてゐた

それはもうわたくしたちの空間を二度と見なかつた

それからあとであいつはなにを感じたらう

それはまだおれたちの世界の幻視をみ

おれたちのせかいの幻聴をきいたらう

わたくしがその耳もとで

遠いところから声をとつてきて

00 そらや愛やりんごや風 すべての勢力のたのしい根源

万象同帰のそのいみじい生物の名を

05 ちからいつぱいちからいつぱい叫んだとき

あいつは二へんうなづくやうに息をした

白い尖つたあごや頬がゆすれて

ちいさいときよくおどけたときにしたやうな

あんな偶然な顔つきにみえた

けれどもたしかにうなづいた

(「ヘツケル博士！」)

10

わたくしがそのありがたい証明の

任にあたつてもよろしうございます」

仮睡酸の雲のなかから

凍らすやうなあんな卑怯な叫び声は……

15

(「宗谷海峡を越える晩は」)

わたくしは夜どほし甲板に立ち

あたまは具へなく陰湿の霧をかぶり

からだはけがれたねがひにみたし

そしてわたくしはほんたうに挑戦しやう

たしかにあのときはうなづいたのだ

そしてあんなにつぎのあさまで

胸がほとつてゐたくらゐだから

わたくしたちが死んだといつて泣いたあと

20 とし子はまだまだこの世かいのからだを感じ

ねつやいたみをはなれたほのかなむりのなかで

ここでみるやうなゆめをみてゐたかもしれない

そしてわたくしはそれらのしづかな夢幻が

つぎのせかいへつゞくため

25 明るいい、匂のするものだつたことを

30

どんなにねがふかわからない

ほんたうにその夢の中のひとくさは

かん護とかなしみにつかれて睡つてゐた

おしげ子たちのあけがたのなかに

ぼんやりとしてはいつてきた

《黄いろな花こ おらもとるべがな》

35

たしかにとし子はあるのあけがたは

まだこの世かいのゆめのなかにゐて

落葉の風につみかさねられた

野はらをひとりあるきながら

ほかのひとのここのやうにつぶやいてゐたのだ

40

そしてそのままさびしい林のなかの

いつびきの鳥になつただらうか

Iestudiana を風にききながら

水のながれる暗いはやしのなかを

かなしくうたつて飛んで行つたらうか

やがてはそこに小さなプロペラのやうに

音を立て、飛んできたあたらしいともだちと

無心のとりうたをうたひながら

たよりなくさまよつて行つたらうか

わたくしはどうしてもさう思はない

50

なぜ通信が許されないのか

許されてゐる そして私のうけとつた通信は

母が夏のかん病のよるにゆめみたとおなじだ

どうしてわたくしはさうなのをさうと思はないのだらう

それらひとのせかいのゆめはうすれ

55

あかつきの薔薇いろをそらにかんじ

あたらしくさはやかな感官をかんじ

日光のなかのけむりのやうな羅うすものをかんじ

かがやいてほのかにわらひながら

はなやかな雲やつめたいにほひのあいだを

60

交錯するひかりの棒をよぎり

われらが上方とよぶその不思議な方角へ

それがそのやうであることにおどろきながら

大循環の風よりもさはやかにのぼつて行つた

わたくしはその跡をさへたづねることができる

65

そこに碧い寂かな湖水の面をのぞみ

あまりにもそのたひらかさとかがやきと

未知な全反射の方法と

さめざめとひかりゆする樹の列を

ただしくうつすことをあやしみ

やがてはそれがおのづから研がれた

天の璃の地面と知つてこゝろわななき

紐になつてながれるそらの楽音

また瓔珞やあやしいすものをつけ

移らずしかもしづかにゆききする

75

巨きなすあしの生物たち

遠いほのかな記憶のなかの花のかをり

それらのなかにしづかに立つたらうか

それともおれたちの声を聴かないのち

暗紅色の深くもわるいがらん洞と

80

意識ある蛋白質の砕けるときにあげる声

亜硫酸や笑氣のほひ

これらをそこに見るならば

あいつはその中にまつ青になつて立ち

立つてゐるともよめいてゐるともわからず

頬に手をあててゆめそのもののやうに立ち

(わたくしがいまごろこんなものを感ずることが

いつたいほんたうのことだらうか

わたくしといふものがこんなものをみることに

いつたいありうることだらうか

90  
そしてほんたうにみてゐるのだ)と

斯ういつてひとりなげくかもしれない……

わたくしのこんなさびしい考は

みんなよるのためにできるのだ(と

夜があけて海岸へかかるなら

そして波がきらきら光るなら

なにもかもみんないいかもしれない

けれどもとし子の死んだことならば

いまわたくしがそれを夢でないかと考へて

あたらしきくつとしなければならぬほどの

あんまりひどいげんじつなのだ

感ずることのあまり新鮮にすぎるとき

それをがいねん化することは

さちがひにならないための

生物体の一つの自衛作用だけれども

いつでもまもつてばかりゐてはいけない

ほんたうにわたくしはこの感官をうしなつたのち

あらたにどんなからだを得

どんな感官をかんじただらう

なんべんこれのかんがへたことか

むかしからの多数の実験から

俱舎がさつきのやうに云ふのだ

二度をこれをくり返してはいけない

おもては軟玉と銀のモナド

半月の噴いた瓦斯でいつぱいだ

巻積雲のはらわたまで

15  
月のあかりはしみわたり

それはあやしい螢光板になつて

いよいよあやしい苹果の匂を發散し

なめらかにつめた窓硝子さへ越えてくる

青森だからといふのでなく

大てい月がこんなやうな暁ちかく

巻積雲にはいるとき……

20  
《おいおい あ顔いろは少し青かつたよ》

だまつてゐる

25  
おれのいもうとの死顔が

まつ青だらうが黒からうが

きさまにどう斯う云はれるか

あいつはどこへ墮ちやうと

もう無上道に属してゐる

20  
力にみちてそこを進むものは

どの空間にでも勇んでとびこんで行くのだ

ぢきもう東の鋼もひかる

35| ほんたうにけふの…きのふのひるまなら  
おれ<sup>たち</sup>はあの重い赤いポムプを…  
（もひとつきかせてあげやう

ね じつさいね

あのときの眼は白かつたよ  
すぐ瞑りかねてゐたよ

40| まだいつてゐるのか  
もうぢきよるはあけるのに  
すべてあるがごとくにあり

かゝやくごとくにかがやくもの  
おまへの武器やあらゆるものは  
おまへにくらくおそろしく  
まことはたのしくあかるいのだ

（みんなむかしからのきやうだいなのだから  
けつしてひとりをつてはいけない）

ああ わたくしはけつしてさうしませんでした

あいつがなくなつてからあとのよるひる  
わたくしはただの一度たりと

あいつだけがいいとこに行けばいいと

さういのりはしなかつたと思ひます

## 場のダイクシス分析

傍線を引いた箇所について、行番号順に、その「場」を分析していく。とくに、場の転換が行われている部分、相異なる場と場が対比されているような箇所に着目し、設定された場の転換点、空間構

造から、段落構成に相当するような構成部分の切れ目を判然とさせてみたい。そのために必要な場合のみ、他のダイクティックな要素についても言及する。

1行目 闇夜の野原の中を行く客車の中と外の風景、という基本的な語りの場が提示される。ただ、5・6行目に示されている通り、幻想の中のような存在態様をあわせもつ場である。

8行目 汽車がどこかの停車場に停止していることが示される。この停車は16行目まで維持される。

18行目 語り手の存在は車室の中にあることが明示される。

22行目 再び走り出した客車であるが、「ここでは」という現実と背く空間での存在態様が表示され、語りのレベルが5・6行目と同様の幻想のレベルに移行したことが示される。この移行は21行目に始まつている。これが幻想であることは、31行目に明らかに示される。

33行目 「そこら」とは35行目にあるとおり、車室の中であろう。車室の幻想風景である。

この間、41行にあるように、回想の中の昼の風景が呼び起こされる。46行目 この2行は、引用の体裁であるが、ここだけでは明らかでないものの、全体からみて、現世をさすものと考えられる。

45行の「おまへ」とはとし子とみなすことができる。

55行目 窓外の停車場。再び客車は駅にとまったと思われる。

57行目 55行目の「あいつ」とはとし子であろう。とすると、死んだあとのとし子が行く世界の方向の意味となろう。

58行目 前行の繰り返し。

この間、死にかかわる不思議な童話的空想。

78行目から、決然とした、思索開始の宣言。

82行目 死後のとし子の行く先。

95行目 この世。

97行目 この世。

98行目 この世。

00行目 よくわからないが、原初的な空間か。賢治の童話には、語りのオリジンを遠くに求める傾向があることが指摘されている。

36行目 この世。ここから死出の旅路をゆくとし子のイメージが展開される。

45行目 「水の流れる暗いはやしのなか」「さびしい林のなか」をさす。この部分の鳥のイメージは不吉なもので、とし子の足どりは暗いイメージで語られる。

64行目 とし子が「われらが上方とよぶその不思議な方角へ」

「大循環の風よりもさはやかにのほって行つた」その軌跡。54行以下の一連は、仏教的な転生の明るいイメージをもつ。ただ、やや退行的な、力のなさを感じる。

65行目 「天のる璃の地面」

77行目 72〜76行の内容をうける。この行で天界のイメージは完結する。

82行目 とし子のいる死後の世界。一転してここでは、地獄のようなイメージが描かれる。

06行目 この世。

13行目 語り手のいる客車の窓外。この行から、語りの場に戻っている。

28行目 「墮ちやうと」とあるので、どこでもよいが、想定されているのは餓鬼道、畜生道などといった、好ましくない世界

である。

30行目 無上道。この部分は、23行目の分裂した自我の悪意の発言に反論している。しかしこの反論は、34行目に失速し、35行目の発言を許してしまう。

51行目 救済される天上の世界。

### 「青森挽歌」の語りの構造

右の場のダイクシスの分析をもとに、主として空間構造をもとにしながら、「青森挽歌」の語りの構造を、詩の進行を追って、考えてみよう。

1行〜20行目 「やみよののはらのなか」を走る夜汽車の車室に語り手はいる。そこから外をながめている。汽車は駅に停車したりするので、「語りの現在」は夜汽車の進行に従って動いて行く。これは「小岩井農場」に代表される、賢治の「心象スケッチ」の手法における語りの基本的構造に合致する。

21行〜36行目 5・6行目に示唆されていたように、現実の風景に重ねられて語り手が描く幻想が示される。

37行〜39行目 この詩の主題とも言うべき「とし子の死の意味」を考えなければならぬという、語り手のもう一つの自我からの囁き。

40行〜45行目 昼の現実の場の回想。語り手は現実の問題を回想し「だから睡いのはしかたない」と、もう一つの自我からの囁きを拒否しようとする。過去の場面であること



が示すように、語り手の姿勢は消極的である。

46行～54行目 46・47行目は引用の形。だが、とし子への呼び掛けを意味すると思われ、睡い曖昧な意識の中で、語り手はとし子への語りかけを始める。この曖昧な意識の中では、「おまへ」という二人称の呼び掛けとしてそれは現れる。ただ、すぐそれを下手なドイツ語だとする揶揄の声（語り手の意識の底に現れる分裂した自我からの声）に打ち消される。そうして自分の朦朧とした意識を語り手は自覚する。

55行～59行目 死後のとし子の道程を想像する。ここで始めて「考へださなければならぬこと」を考え始める。

60行～77行目 童話的幻想。死のイメージの強いものであり、後にでてくる不吉な鳥のイメージも現れる。曖昧な、力弱い想像力にとらえられた、死のイメージであろう。

\*ここまでは、第一部。語り手の場所、語りの現在が明示され、そこで語るべき主題も予示される。しかし、曖昧な意識の状態に語り手があることも示され、幻想や回想、分裂した自我からの声、空想などが交錯している。

78行～98行目 とし子の死後について考えなければならぬとする決意が述べられ、ようやく主題についての思考が展開される。「おれたちの空間」「おれたちの世界」から、離れて行くとし子の姿が想起される。ただし、これは想起である分だけ、現在の語り手からは距離があり、とし子は「あいつ」として対象化されている。

99行～18行目 何かの学問書に基づく分裂した自我からの声。それを語り手は「卑怯」と位置づけ、改めて決意を述べて

いる。その上で思考は継続される。

19行～48行目 再びとし子の死後についての思考が展開される。ここでは「おしげ子たち」の夢に基づき、「この世界」「ここ」から「つぎのせかい」へゆくまでの「しづかな夢幻」としての過程を想像する。そこは「野はら」であり、「さびしい林」である。しかしこの想像は、「鳥」の不吉なイメージに支配され、しだいに暗い陰を帯びる。救済からはほど遠い、さまようとし子のイメージである。

49行～53行目 前行までの想像が否定される。語り手が我にかえった形である。そして再び、今度は母の見た夢に基づいて、とし子の死後が想像されるという方向が予示される。

54行～77行目 仏教的な救済、天界のイメージによるとし子の死後の想像。天沢退二郎は、この部分を「童話『ひかりの素足』でお馴染みの、如来寿命品敷き写しの風景」としている。(5)

78行～91行目 一転して暗い世界のイメージ。救済されないとし子を想像している。

92行～121行目 語りの現在、語りの場に語り手が帰り、いままでの想像、空想を含めてその意味を問い直す。「海岸」が現実の場を代表し、「いま」（98行）が、語りの現在を明示する。そうして死後のとし子を考えることが、結局は意味のない概念化にすぎないことを自覚する。

\*ここまでは、第二部。とし子の死後についての様々な空想と、それについての否定。以下、語りの現在に戻って第三部。

13行 22行目 現実に戻る決意に基づき、再び汽車の窓外の風景が描写される。「おもて」という言葉が明らかにそれを示す。

23行 40行目 分裂した自我が、死の場面のとし子の姿について語りかけ、もう一度語り手とし子への追想に誘おうとする。それに対して語り手は「だまつてゐろ」「まだいつてゐるのか」という反論を試みる。

41行 45行目 すべての現実を肯定し、自分の意識の在り方をのめくらしいものとして否定してあかるい「まこと」に帰ろうとする決意。

46行 52行目 分裂した自我、しかし語り手を追想に誘うものではなく、むしろ超越した自我から、あるいは、超越的な宗教的な存在からの語りかけと、それに応じて、自らのこれまでの考えを利己的なものではなかったと反省する返事。ただこの返事は前段の決意からすると弱々しく、語り手は未だこの問題についての決着を得ていないことが示唆されるようである。

## エピローグ

こうして検討してみると、夜汽車の客車にいる語り手が、車内や窓外の風景を眺めながら、現実と幻想・空想を行き来しつつ、とし子が死後どうなったのかについて、様々に考えを巡らせ、それらをすべて無効としつつ、現実には立ち向かおうという勇気を、弱々しげながら持とうとしている……という詩の全体像が見えてくるだろう。もちろん、こうした読みは、いわゆる「綿密な読み」を行えば

顕現するものなのであろうが、ダイクシス分析は、その綿密な読みの作業の手掛かりとなり、読者が共有すべき「テキストの語りの構造」についての基本的理解を可能にするものと言えるだろう。

## 注

1 小森道彦 「人称ダイクシスの磁場」 安井泉編 『グラマー・テキスト・レトリック』 くろしお出版 一九九二 P 186

2 S・C・レヴィンソン 安井稔・奥田夏子訳 『英語語用論』 研究社一九九〇 P 62

3 日本国語教育学会高等学校部会第二十八回研究会（一九九五・五・二〇、東京学芸大学附属高等学校）における筆者の発表「宮澤賢治の詩における語り手」の中で、この問題に言及した。この発表は別に論文化する予定である。

4 この行は「みんなよるのためにでるのだ」というのが初版本の形であり、校本全本文もそうなっているが、天沢退二郎によれば、この部分は、印刷用原稿からみて明らかな誤植であり、「できるのだ」という形が正しいということである。ここではその見解に従い、「できるのだ」という形をとっておく。新しい校本全集では直されていることと思う。

天沢退二郎 『宮澤賢治の彼方へ』 思潮社 一九八七（改訂版） P 212 参照

5 天沢退二郎 前掲書 P 192

（まつもと おさむ 上越教育大学助教授）